宮城の沿岸部

東日本大震災の津波で被害を受けて人口が減り、観光客数も落ち込んでいる宮城県の沿岸部で、国内外から人を呼ぶ動きが活発になってきた。南三陸町では訪日外国人に震災の記憶を伝え、気仙沼市では水産業が盛んな土地でしか味わえない体験を訪問者に提供する。被災地に人を呼び込み、街に活気を取り戻しながら震災の教訓を広める。

「ちょいのぞき」では地元企業の活動などを幅広い年齢層に伝える（気仙沼市）

観光客呼び込め

震災の記憶伝承／水産業 親子で体験

南三陸・気仙沼の企業など

南三陸ホテル観洋（南三陸町）の倉橋誠司インバウンド課長は、地方ホテルの勤務者では異例の経歴を持つ。鋼管メーカーに勤務し、25年間をイタリアやシンガポール、ベトナムなどの海外で過ごした。ホテル観洋に勤めることになったきっかけは東日本大震災だ。

倉橋氏が勤務する鋼管メーカーは震災後、被災地にミネラルウオーターなどを寄付した。そこで津波被害を自分の目で見て「日本人として、何か役に立ちたいと思った」（倉橋課長）。しばらくして鋼管メーカーを退職し、2015年に再就職先に選んだ被災地の職場がホテル観洋だった。

海外経験の長い倉橋氏は外国人の感覚でホテルを見直して提案し、最近になって実現し始めた。

今年5月には244客室など館内すべてでWi-Fi（ワイファイ）を使えるようにした。都市部では当然のWi-Fi環境も、被災地で完備する施設は多くない。訪日外国人を迎えるため、足元から整えている。

同ホテルが毎日運行し、語り部が震災の記憶や教訓を伝える「語り部バス」ではタブレット（携帯端末）を使い、語り部の話す内容を外国語に翻訳する工夫も取り入れた。対応するのは英語、中国語、韓国語、タイ語と幅広い。語り部は震災直後の痛ましい様子も乗客に伝える。その表情と内容に同時に触れてもらい、語り部の心情を実感してもらう取り組みだ。

「今は利用者のうち外国人の比率は1%未満だが、研究者や行政関係者など重要な役割を果たしている人も多い。地道な努力を重ね、海外にも震災の教訓を伝えたい」（ホテル観洋女将の阿部憲子氏）。今後も海外からの集客に力を入れる。

一般社団法人の気仙沼地域戦略（気仙沼市）は地元企業などと連携し、水産業が盛んな「海の街」らしい体験を集客の柱に据える。「ちょいのぞき気仙沼」と題して魚市場や製氷会社、鮮魚を運ぶ専用箱メーカーなどの仕事を体験するプログラムを用意し、親子連れなどを呼び込んでいる。

16年は2100人余りがプログラムに参加した。今年は9月10日時点で1560人を集め、昨年を超える可能性が高い。気仙沼地域戦略の小柳朋子氏は「宮城県外からの来訪者は岩手県一関市など近隣の人たちが多いので、さらに遠いエリアからも呼び込む工夫を考えていきたい」と話す。

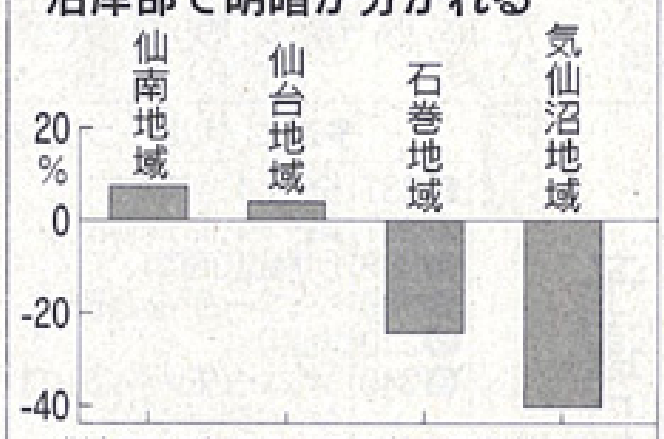
将来の夢は「気仙沼全体を、いつ訪れても何かが楽しめるテーマパークにすること」だという。

宮城県がまとめた16年の観光客入り込み数は6083万人で、震災前の6128万人に近い水準まで回復した。ただし、この結果は仙台市など内陸部の集客増の結果だ。石巻地域では10年の入り込み数を24%下回り、気仙沼地域も40%の大幅減となっている。

気仙沼観光コンベンション協会の臼井亮局長は「震災遺構や復興の実態を間近で見ることができる被災地は、工夫次第で人を呼べる場所だ」と語る。被災地に人を呼び込めるかどうかは、そこに住む人たちの知恵と自助努力にかかっている。

（仙台支局　村松進）

宮城県内の観光客数は内陸と沿岸部で明暗が分かれる



（注）2016年の入り込み数を震災前の10年と比べた増減率。宮城県まとめ

タブレットを活用して外国人にも分かりやすく震災の記憶を伝える（南三陸町）

東奔北走